

〔古事記傳 四十四〕島とは、凡てもと周廻に界限の有て、一區なる域を云名にて、海申には秋津島と云も、本孝安天皇の都の名にて、大和の内の地名、應神天皇の都も輕なるを、輕島明宮と云類なり。

〔延喜式 祝詞〕祈年祭○中

生島能御巫能辭竟奉、皇神等能前爾白久、生國足國登御名者白氐、辭竟奉者、皇神能敷坐島能八。十。島者、谷螟能狹度極、鹽沫能留限略○下

〔八雲御抄三上〕島まつねひこぼし俊抄 やを島がくれとは、かくれなり、八そしまは、さる所名もあれど、たゞ島々多なり、ちゑぞはらも、こおほうきやそおきつ所りあも、つはなれ

〔藻鹽草五水邊〕島

うき島もくつ島おほ島名所やそ島八十島也、名所もあれ共、只又多かる島をも云也、わたくしまかも、島おきつ島ら所な島かけ島陰也、島わ但まつね八雲御說、島なみはなれ島ひこぼし後抄と八雲御說也、河島名所ら波まの小島島がくれありそも、つちのやその島わ島の隈わ

〔日本書紀神代〕伊弉諾尊、伊弉冊尊、立於天浮橋之上共計曰、底下豈無國歟、迺以天之瓊瓊玉也此曰努、矛指下而探之、是獲滄溟、其矛鋒滴瀝之潮凝成一島、名之曰磤馭盧島、二神於是降居彼島、因欲共爲夫婦、產生洲國、便以磤馭盧島爲國中之柱柱此云美、

〔古事記上〕於是天神諸命以詔伊邪那岐命、伊邪那美命二柱神、修理固成是多陀用幣流之國、賜天沼矛而言依賜也、故二柱神立訓立云、天浮橋而、指下其沼矛以畫者、鹽許袁呂許袁呂邇此七字畫鳴訓云那而、引上時、自其矛末垂落之鹽、累積成島、是淤能基呂島、自淤以下

〔古事記傳四〕淤能基呂島私記に、自凝之島也、猶如言自凝也とあり、彼許袁呂許袁呂にか